

日本人が日本人としての誇りと自信を喪失したのは何時なのか、それはどういうきっかけがあった、臆抜けたカネ・損得中心の日本人に墮落したのでしょうか。

そもそも皇紀二六八五年を誇る皇室を戴く和の国、日本が何故、大東亜戦争を戦い、所期の崇高な目的を大きく逸脱し、最終的には世界を敵に回すような第二次世界大戦で大惨敗したのか、その紆余曲折の中に真因があるように思えます。

「人として守るべき道義」を、何より重視し恥ずかしい行動は取らないことに命を賭けた義の国日本を、今一度取り戻したいと願っています。

先日、新保祐司先生の『美か義か』藤原書店を読み、感動と共に、そうか、やっぱりそうだったのかと深く納得させられました。奈良時代は義の時代、平安時代は美の時代から掘り起こし、明治は義の時代、大正は美の時代、昭和の戦前までは義の時代、昭和の終戦後から平成は美の時代、そして令和は義の時代でありたいと語っておられます。

「人間が人間である価値は、この美と義の二つにある。そして美か義か、これが人生最大の問題である。様々な知識や情報が溢れ、根本的なものが見えにくくなっているのである。」「維新の志士は、草莽の志士として輩出した時代であった」と。

碩学安岡正篤師は「自ら信じる正義の為に不利はおろか、時には死をも辞せぬことが人間の貴い道徳であり、権威である。この信念と気節のある人々が国民の指導者に輩出するか、日本を救う道はない」と述べておられます。

或いは内村鑑三は、『後世への最大遺物』の中で、明治二七年に「後世のために、私は弱者を助けてやった、後世のため、私はこれだけの艱難に打ち勝ってみた、後世のため私はこれだけの品性を修練してみた、後世のために、私はこれだけの義侠心を実行してみた、後世のため、私は高尚なる生涯を生きた、これらが後世への最大遺物である。すなわち私に五十年の命をくれた、この美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、この我々を育ててくれた山・河これらに何も残さずに死んでしまいたくない。私はここに一つの何かを残して往きたい。英語でいう memento(メモメント)を残したい」と、述べています。

社長どうでしょうか。「草莽の志士」「信念と気節ある人々」「後世の為に何かを残したい」当に、我々中小企業の社長の心構え、正義を守る信念に外なりません。

政治が悪い、官僚が悪い、大企業が悪い、アメリカが悪いという前に、我々自身の深い反省と、日々の義の実践躬行こそが、輝かしい日本を取り戻す唯一の正しい道に相違ありません。社長、勇気を持って義を実践して参りましょう。

今月のポイント

義の時代を共に

創って参りましょう。

